

龍虎八天狗

母恋鳥



吉川英治全集

別卷 3

編纂委員

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作権者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・別巻 3 龍虎八天狗 母恋鳥

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式講談社

株式会社 東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一〇二
電話東京(〇三)九四五局一―二―二(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特澱

第一刷 昭和四十二年六月二十日 第六刷 昭和四十九年五月二十日

定価は箱に表示してあります

目次

龍虎八天狗

一

母恋鳥

六三

龍
虎
八
天
狗

第一篇 高 野 篇

お 止 山

サッと、小さい虹が立ったかと思れば、それは岩のかげから舞い立った雉子のつばさだった。

ふいに、かすみのふかい谷から谷へ、天女が帯をながしたかと思れば、それは愛らしい風鳥の尾であった。

慶長十八年の、四月なかばのころ。

世の中は、兵乱のつむじ風にすぎ、人はみな血ばしつた眼をしていたが、こころは、その戦雲の下界を遠くはなれて、万花の色と、春日のかげやきにみちた高野のいただき。九百九十坊の僧院をつつむ寂光の春は、天国のようにかすんでいた。

ビビビビ——ッ、また駒鳥がたかく啼く。

こんもりと、むらさき色にけむっている神代杉のむこうに、塔の九輪や金堂の瓔珞が、星のようにキラキラ光っている。そしてかすかに、鉦鼓や磬や梵鐘の交響樂が流れてきて、あまい

眠気をさそうのであった。

すると、ふいに、勅使門のある青巖院の裏山あたりで、がさ、つな人間の声がした。

『やッ！ な、なんだろう。これは？』

みると、高いところに一人の男がいた。笹むらのなかで、手を振っているのだ。しかもそこは、落星壇とよぶ木のないお止山の一角だった。

お止山というのは、つまり立ち入り禁止の場所である。その、はいるべからざる山に、無法なひとかが見えるのだ。それのみか、男は、

『ウーム、ふしぎだ！ これは何かいわくがありそうだぞ。オウ——イ、猿川、猿川ッ』

と、はばかりもない声をあげて、後の谷間へむかつて連れの者を呼んでいた。

『お止山だぞ、大きな声をするな』

小田原谷の下から、木魂がえしにいう者があった。

『なんの、おれたちは、公儀のお役目で歩いているのだ、はばかりことがあるものか。だが猿川、まあとにかくここへ来てみろ、ちょっと奇妙なものがある』

『オオ、なんだ？』

熊笹をかきわけながら、ガサガサと駈け上がったくる音がする。むろん、裏谷にも柵があるが、それをふみこえてこの落星壇のいただきへのぼってくる。

禁札の文字も読めない、無学な木樵でもあらうかと思うと、そこに立つたのはふたりとも、どうどうたる武士である。洪染のあわせに菖蒲草の山袴をはき、腰にはふとい朱鞘の大小、ひとりには小手に鎖襦袢の肌をのぞかせ、ひとりには紺地の武者羽織

をひっかけていた。

『なんだ雲八、仰山そうにおれをよんで？』

『奇怪なものだ。おれにははんだんもつかぬので呼んだのだ』

『いや、それならわかった』

『なに、わかつていると？』

『されば、この山の上を落星壇とよんでいるとおり、王朝の昔、おおきな隕石がおちたあとがあるという話。ふしぎというのは、その隕石でも見たのだから』

『ばかなことを！ そんな伝説めいたものではない。おれのいうのはこれだ』

と、武者羽織をきた東麻雲八、連れの猿川半之丞の手をグン

ととつて、頂上の東がわへツカツカとすすみ、

『おい、これをみろ』

と土のうえをゆびさした。

『フム？……』

と猿川半之丞は、なんの気もなく足もとをみたが、毒気に

も吹かれたように、ハッとたちすくんでしまった。

『オオ、これは呪詛矢だ！』

土のなかに、深く突き刺さっていたのは、火色塗の矢柄に、

まっ黒な、鴉バネを植えた呪い矢だった。呪詛の主が、呪いを

こめて、ふかく大地へ突きさした一念の燃ゆるかのように、矢

柄の朱漆はことに赤かった。

『えっ、呪詛矢か、これが……』

とはじめに見つけた東麻雲八も、眸をあらためてジッとなが

めた。

『しかし猿川。矢羽にも黒、白、石打、妻白、斑入、さまさま

に種類があるぞ。どうしてこれを呪詛矢というか』

『弓は武芸四門の第一位だ。きさまは徳川家の中でも東麻雲八

と聞こえるほどの者でありながら、それくらいのことをしらぬ

のか。まず何よりも証拠は、矢筈を三ツ口にわり、鳥の生バネ

を番えてある。陣矢はむろん、けいこ矢でも、鳥羽は人の忌む

もの。しかも、その鳥は七日のあいだ、餌をあたえず、呪いを

こめて護摩壇に飼ひ、その生ばねをとつて、骨は呪詛矢を刺し

た真下へ埋けることになっている』

『と、すると、この呪い矢は、いったい何者が埋けて、たれを

呪詛したものであろう？』

『さあ、この半之丞にも、それまでの鑑定はできぬが、とにかく、その矢をぬいてみれば、何かの印があるであらう』

『なるほど。この青巖院は、もともと豊臣家の祈願所であつた

所——秀吉の母、一子秀次などの御霊廟もある。ウム、そうす

るとこの呪い矢も、あるいは関東の滅亡を祈ったものかもしれ

ぬな』

『とにかく、引っこぬいて、あらためてみるのが一番だ』

『オオ、抜いてみよう！ だが下手をすると途中からおれてし

まうだろう』

『いや大丈夫。おい、きさまも小柄をぬいて、まわりの土を掘

つてくれ』

『こころえた——』

と、ふたりはそこへひざをついた。

百合の根でも掘るように、矢のまわりを、サクリ、サクリと

根よく小柄で掘り上げていった。そして、一尺五寸ばかりの深

さになると、雲八は、

『もうよろう——』

と、手をつっこんで矢柄の根元を大事に掴み、ズ……ズ……

ズッ……と、まっすぐに引抜いた。

スペイン短銃

ボンとぬき取った矢の先から、バラリと土のかたまりが落ちると、剣がれた下から、燦として、雁股の鏝がするどい光りをはなつた。

東麻雲八は、袴のすそでその矢をはさみ、元から先までを、キューッとふいて、

『おうッ……』
と呻きながら、顔色を変えた。なぜといえば、その呪詛矢には、自分たちが大御所さまと仰ぐ主人の名がしるしてあったから——。すなわち矢柄の一端には、小刀彫で、
家康調伏

と、えぐつてあるのみか、梵字の呪文がきざさんである。いうまでもなく、この矢を埋けた主は、徳川家康へ怨みをふくんで、ともに天をいただかずと、調伏の呪いを、この落星壇の地下にこめたものにちがいない。

『おお、これは何奴かが、ここへ祈つて、大御所のお命をちぢめたてまつろうとしたにそういいない。とんでもない真似をするやつだ』

と、雲八は矢を膝にあてて、ヘシ折ろうとしたが、猿川半之丞は、あわててそれをとめた。

『まてまて。後日の大事な証拠を、折つてはならぬ』
『証拠に？』

『家康公をのろう大罪人、それをさがすなよりの手がかりではないか、鏝のもとをあらためてみる。キッと切銘があるだろう』

『なるほど、……』

と、雲八が、さらにグルリとまわしてみると、蚤のようなこまかい文字が沈金してある。陽にすかして読みくだすと、
湖畔瀬田の住人。矢師烏骨斎。御願依而作之。

『矢をつくつたのはこいつだ。湖畔瀬田といえは琵琶湖の辺、そこに住む矢師の烏骨斎とあれば、造作もない、そいつをひくくつて糾問すれば、たのみ主がだれであるかもすぐわかるであらう』

『ところがなかなかわかるまい。はアて、こいつは少しめんどうだ』

『なぜ？』

『なぜといえは、呪詛矢を作ったことが発覚すれば、禁裡のおかえり師でも、逆磔になるおきてだ。それをしつて、あきらかに本名を切銘するはずがない。おそらくこれは偽名だろう』

『なるほど。すると今のような乱世では、矢師の数が何万人とあることゆえ、これは容易に見当がつかぬわけだな』

『しかし、この矢の刺してあった真ッ下には、まだなにか願文がいけてあるにちがいないから、むだと思つて、もう三、四尺掘り上げてみよう。何せい、いつなんどき、関東大阪の合戦となるかもしれない場合、家康調伏とはよいならぬ謀反人……』

もう、好奇心だけではない。事は関東の家康と、大阪城にかかわる問題だ。ましてや猿川半之丞も東麻雲八も、おのれの主

君を呪詛された矢であつてみれば、あくまでこの下手人を知り、実物と調べ書をそえて、委細を駿府の大御所と江戸城にいる秀忠へ報告しなければ役目が立つまい。

刀の下緒をといて襷にかけ、グツと腕をまくりあげた猿川半之丞、小柄を持って、なおもけんめいに一尺、二尺と掘りこんでゆくと、やがて小柄のきツさきが、グサ！と粘力のある物へ突き刺さつて、容易にそれがぬけなくなった。

『やつ、手ごたえがあつたぞ！』

『なんだ？ なにがあつた？ ……』

泥まみれになるのもわすれて、東麻雲八、思わず持っていた呪詛矢を投げだし、穴の中へ首をのぞかせて見ると、半之丞が無理に小柄をひいたはずみに、土の底から、チラリと、黄金板のような光りが眼を射た。

『しめた！ たしかに願文——』

と半之丞は袖をたくしあげて腕の根まできぐりいれた。指ぎわりの感じでは、どうやら短冊形ぐらいな小ばこらしい。それを驚づかみにして、グイと上へ引きだそうとする——その時であつた。

『これッ。何をしておるか』

『という耳元の大きな声。』

穴の中に気をとられていた二人が、ハッと顔をふりあげた。たんに、焼けた針金のようなものが風を切つて、ビシッと半之丞の目をかすつた。

『あッ！』

とおどろいて、猿川が身をかわしたので、東麻雲八はフィを食つてその鞭にうたれ、うしろへ腰をついてしまった。

何奴？

カッと眼をいからしてふり仰ぐと、薄いつづれの衣に、細鯉をむき出した老法師である。手に、雲八が捨てた朱骨の呪詛矢を持って、銀眉のかけからするどい眼ざしを射むけている。

『や。この老ばれ。なにをするかッ』

はね返つて、雲八と半之丞は、朱鞘の太刀にそりを打たせ、鯉口をきるやいな、老法師の細首へ抜き打を見舞いかけた。と——その殺気とは反対に、明るい哄笑が、カラカラとひびいて、老僧の童顔は笑いだしていた。

『これこれ。戸まどいをしてはいけないよ。何をするかとはわたしの方からきくことだ。なんで禁札を犯してこのお止山へふみこんでまいった』

『だまれ。おれたちは駿府におわす大御所家康公の直参だ。公儀の役命を帯びてとおるに天下にとおれぬところはない』

『ではうけたまわろう——お役目は？』

『九度山目付のひとり、猿川半之丞、東麻雲八の両名、この服装を見てもわかるであらうが』

『は、は、ははは……。だからおかしい、戸まどいしておるというのじゃ。九度山目付と申すのは、去ぬる年より高野の北谷に隠棲している、真田幸村父子の見はりについている、徳川家のかくし目付でござろう。——とすれば其許たちの役目は、朝に夕に、幸村父子の出入を見とどけ、大阪方と気脈をつうじているかおらぬか、彼らが浪人者でも狩りあつて、関東へ弓を引くしたくでもしはせぬか、まず、そんなことでも、まめに気をつけているのが役目の本来じゃろう。この高野領の上には、なんの権限もないはずじゃ』

『やかましいッ！ たとえ役目は九度山目付でも、およそ関東へ逆心をいだく者は、仮借なくなわ打つてだせと、大御所の直



命をうけているわれわれだ。このお止山に不審があったから調べたのだ。して、おのれはいったいどの売僧だ」

『わしか、わしは木食という乞食坊主——』

『ヤッ、では一山の座主、この青巖院の和尚だな。おりからよい所へ出てうせた、この落星壇は汝の院内、その地域からおそれ多くも、家康調伏と彫りつけた呪詛矢が出たのをなんと申しひらく』

『ほう……これか』

と、木食上人は、手につかんでいた矢骨をチラと見て、さりげなく、

『何者がこないたずらを……』

つぶやいているかと思うと、ビシリッと三つ四ツにヘシ折つて、向うの草むらへ投げすてた。

『あつ——大事な証拠を』

『うぬッ、高野の座主とてゆるしはおかんぞ』

むらと燃えた怒氣にまかせて、鞘をだした二すじの白刃が、ヒューッと木食の胸をはすかに斬ッてぬけた。

だが——当然バツと血しぶくはずの手ごたえはなく、半之丞の剣は空を切つて横にながれ、雲八の太刀は大地を打つてツンのめつた。

『おい、どうした』

うしろの声にハッとして、すぐに刀を持ちかえると、四、五間先の岩の上に、童顔をニタニタ笑みくずして木食上人、かやの実かなんの木の实か、殻をやぶつてポリポリとかんでいる。『ちイッ、この売僧ッ！ よくも九度山目付のおれたちを愚弄したな』

朱をそそぐと二人とも、夜叉か天魔かの形相と変つた。こん

どこそ、おのれ真つ二つと、爪先にじりに左右から、ジリ、ジリ……と白刃をよせてせまっていた。

両方の構えを見くらべて、木食は、腰もたてずに、足もとの枯れ枝をひろいとり、ビタリと中段に持つてこう言つた。

『八葉蓮華の峰——三密の谷、この法の界に、一滴の血を穢すにおいても、九十九坊の梵鐘とともに、うぬら二人、無事に下山はかなわぬぞ。よいかつ、よくば参れ！』

『ウーム、仏地の禁断がなにものだ。天に日輪、地に大御所、その家康公のご威光をもつて、不浄な売僧をせいはいするのじゃ。木食ッ、そのほそ首をもううけたぞ』

乱世の人心は、血にすさんでいる。法の光りもない、おきての權威もない。さきに織田信長は叡山を焼き、秀吉が根来一山に火を放つたれいもある。ましてや、いま、盟主の豊臣秀吉はすでに亡く、大阪城には、若き秀頼と母淀君とがこもるばかり、天下はおのずから東海駿河の国にある家康の手へかたむこうとして、それをはばめる者もないいきおいだ。その走狗たるふたりの目に、高野なものぞとつるのもぜひがない。

ましてや木食は、一山の座主とはいえ、乞食坊主にひとしい木の実食らいの瘦法師にみえる。その細首と呪詛矢の筒条をそえて駿府城へおくるとも、よも大御所から、感状こそあれ、おとがめはあるまい！ という意気こみ。

『こいつッ！』
とおめくと、雲八と半之丞は、大刀に風を呼んで右左から斬りつけた。

雲八のト伝流、半之丞の達者な上泉流の太刀。そのいづれの切ッ尖をうけても、木食の命は当然ないはずだった。ところが、意外な方角から、なにか、流星のように、シューッと空に

煙の尾をひいてきた一箇の鉄片が、ふたりの足もとで、轟然と爆裂した。

ズドーン！ とすさまじい山こだま。地を引ッ裂いた雷火の力は無数な土くれをバツとはねとばし、虚空いちめんに、土と草の葉とかれ枝を散乱させた。そしてその砂塵のなから、真鍮筒銀銃のスペイン製の短銃と、ひものついた火薬ぶくろとが、おなじようにやぶれて落ちてきた。

紀の川くだり

土くれに目をつぶされたか、ふいの爆音にきもをつぶしたか、もうと立った白煙が、やがて晴れたとき、目をあらためて見れば、九度山目付の猿川と東麻は小田原谷をまっしぐらに逃げおりて、雉木と神代杉の底へ影をかくしていた。
深碧の空には、いまの音におどろいて舞った群鳥が、まだ巨大な蛇の目をえがいている。

『……大助だな』

火繩のむすびついた短銃と、紐だけになった火薬袋を見くらべて、木食上人、あたりをズーッと見まわしたが、どこにも、その持主らしい者は見えないで、そのくせ、

『木食さま——』

と、呼ぶ声がする。

『オオ、どこだ？』

『あぶないところでございましたね』

『ウム、あぶない所であった。法の御山も、禁札の地域も、あ

「あいう 獣共に会っちゃかなわんよ」

『わたしもその禁札でこまっておるのですが、なんと木食さま、格別をもって、今だけそこへ参ることをおゆるしなすってくださいますか』

と言われているが、気がついた。すぐ後の青蔵院の御靈廟さかい、柵内禁入の杭のそばに、千年榧という大木がある。——その大木の天ッべんに、ニッコリ笑っている少年の顔が葉がくれにチラと見えた。

千年榧はすこし低地なので、この落星壇の上と肩をならべている高きだ。ちょうど谷をへだてて向かい合ったようなあんばい。

『また鳥の巢か、木のぼり遊びか。禁札のお止山にゆるすということはできぬが、豊家の御大事、密々に用があるから、すぐ樹をおりて院の表門からまわってくるがよい』

『じゃ、そこへ参ってよろしゅうございますか』

『早くこい——。人目につかぬように』

降りるのかと思うと、その少年、むささびのようにスススと横枝へはいだした。バサツと枝が弓形に曲がるところを、その枝さきからワザと弾力をもたせて、ヤツ——と叫びながら飛びおりにきた。

ボーンと飛びついた落星壇の崖。その身のかるいこと、まるで両の袂がつばさのようにみえる。

『木食さま、なんと、早かったでございましょう』

上にのぼってとくいな顔だ。山じたくだが、大小はすばらしく立派な少年である。年はちょうど十四五ぐらい、日にやけて色は黒く、明眉紅唇という面だち、小袖をみると六文銭の紋であ

る。

『ああ、おいしいことを……』

と破損した短銃にちよつと愛惜のつぶやきをもらして、『ここが殺生禁断のお山でなければ、二ツ弾で撃ちたおしてやるのであったが』

『火繩に火薬袋をつけた投げ鉄砲、おどしには面白い計略であった。さすがは大助、幸村殿のおしこみがあるな……』

と、肩をたたいたが、またすぐに、

『うツかりしている、また他のかくし目付が来ぬともかぎらぬ。大助、手をかしてくれい』

と、木食上人は、さっきふたりが掘り下げた穴の中から、ゾツクリと、一つの革管をつかみだした。革といっても浮文様の金唐草、土をはらうと燦然として、二重にかけた紫の絹房もあせていない。

それは、大いそぎで草むらにかくして、向うにある、隕石の一片をかかえこみ、管のかわりに埋めてしまった。まずこれでひと安心と、手の土をはらって大助を物かげへ呼び、なにかヒソヒソとききやいた。

かしこくうなずいて、大助は腰からほそい網をたぐりだした。手を突ツこむと袋になる、それへ革管をふかくさし入れて、クルクルと巻き、左から右の脇下へはすかにせおった。

この網は武者修業袋といって、武士必携の道具の一つ。また背おいかたも、町人はすべて右の肩から左の脇のしたへむすが、武士はぎやくにかけるのが法である。イザという場合に、右の太刀使いが自由であるために。

『では木食さま、いそいで帰宅いたします』

『おお、くだりとはいえ、九度山まではだいぶあるぞ。道くさ

をせぬようにの」

『承知いたしました』

『いずれ、わしもその内にお父上をお訪ねする。そのせつ、木食よりもくわしゅう話すが、聡明な幸村殿、今日のしだいとその筈のなかをごらんあれば、すべての謎を解くであろう。ウム、これもものちの何かの役にたとう、人目にふれぬよう、もつてまいがよい』

と、さつき、徳川家の目付のまえで、ワザと折って捨てた呪詛矢の切銘のある部分を、大助の手へ渡してやった。そして、『いそいで行けよ』と、またせいた。

『はい！』

と大助。

背には謎の革筥をかけ、帯には呪詛矢の篠を手ばさんで、ばらばらと崖をかけおりていった。その袖にふれ足に散らされる源平つじが、片々と紅白のうずを立てて、たちまちかれの行手を消してしまった。

陽入りの早い八葉の峰は、いつかシットリと夕がすみにつつまれていた。高野惣門の大門口から、女人堂や宝塔をすぎて、北谷九度山の山村まで、四里数丁はタツプリアる。

だが、大助は、祖父昌幸が、父幸村とともに、徳川家の圧迫をうけて、この僻地に隠棲してからの十年間に、高野の谷、紀の山、紀の川できたえてきた健脚をもっている。四里の下山ぐらい朝飯まえだ、ドウーッと落ちてゆく溪川の水より早く、タツ、タツ、タツと踵をけて飛んでゆく。

その登音におどろいて、山鳥が立つ兎が飛ぶ——鹿が猿が藤蔓の崖からビューッと滝津瀬をあびてかくれる影もある。

『大助が行った——たしかに大助！』

『オオ、何やら背なかに背おって、畜生ッ！ 最前の呪詛矢も持っているぞ』

『さては、読めた。あれが幸村の手にわたらぬうち、とちゅうでこつちへ引ッさらってしまわねば』

太鼓反の橋のしたで、こう見おくっているふたりの侍がある。

溪流へかがみこんで、強薬に吹かれた顔をあらっていた東麻雲八と、猿川半之丞だ。

なんで見のがそう、ふたりはヒラリと飛び上がった、不動坂の間道を真一文字にかけくだってゆき、先にまわって、十余名の手勢を集めた。

南へ南へ、蛇々とゆく紺の長流へ、ボカリと宵の月が泛かみだしたころ、ここ紀の川べりには、おりから、あたたかい夜風の地をはって、魔気を伏せてる十四、五本の白刃があった。

手 裏 剣 文

熒惑星がまたたいしている。

南の方をおおぐと、水銀色の春の空に、ボツと赤い一点の妖星が見える。ありありと、地界の人の眼に映じる。

熒惑星！ 熒惑星！

だがが見つけはじめたのか、春になってから、恟々とした人心のあいだに、さまざまな風評がたち、いろいろな臆説がながれた。

九度山にひそむ深淵の龍と、関東方からおそれられている、孔明流の兵法家、真田幸村のわび住居からも、その赤い不気味な星が、破れ頬からのぞまれた。

大助のかえりがおそいので、さきに夕の食事をすました幸村は、閑宅の窓へ円座をよせて、ジイと頬杖をついていた。

『あ、また今夜も……』

その竹縁の外には、幸村の長女で、今年十六になる奈都女が、白梅のような姿をたたずませた。

『たれだ？……』

幸村の声がしずかに問う。

『はい、奈都女でござります』

『暗うなった。灯りのしたくをしてくれぬか』

『おお、まだお灯りが』

と、奈都女は、納戸から父の居間へ短襪をはこび、カチッ、カチッ……とひうち石をすった。

パツと灯しがとると、革の儒者羽織に鯨巻の短刀をおびた幸村の姿と、奈都女の下髪がフツサリとかかった源氏車の帯とが、黄色にあかりの輪の中へ浮きたった。

四壁をみると、古書兵器、星図地水図などがいっぱい。床にはみがきぬいた南蛮筒、長押には長槍、つぎの間には弓鉄砲、異国の望遠鏡、渾天儀、自鳴鐘のようなものまで整然とつまっている。

なるほど、これでは狐疑心のふかい家康が、九度山目付をつけて、この一軒の茅葺屋根を、ものものしく、監視させているのも無理はない。

『お父上さま……』

と、奈都女は、そこから、まだ窓越しに空を見ながら、

『あの、怪しい星の色は、いったいなんの前兆なのでござりましょう』

『あれか？』

と幸村は、ちょっと頬杖をはずして、振りあおいだが微笑をふくんで、

『べつになんの前兆でもあるまい。地湿水温は春の常、気にかけるほどのことはない』

『でも、世間の人はもうします。ありや戦の前兆だ、戦があれば関東と大阪じゃと』

『もつとも、支那には古来から、そういう説がたくさんあった。史記という書物などにも、熒惑星心宿に入れば兵乱のきざし——と、そんなことが書いてある』

『では日本にも、いまに戦がありましようか』

『やがてはあろうか。このままではおさまらぬ風雲ではある』

『——とするとその戦は、お父上をにくむあの家康が、大阪城をうばおうとして』

『しッ……』

幸村の眼がキラとおさえる。

ハツとして、うしろをむくと、向うの板襖がソツと開いて、琵琶をかかえた、十六、七の片目の小法師が、手をつかえている。

きのう、使いに出た奈都女が、北谷にゆき暮れているのを哀れがって、つれもどった者である。

『ご主人さま、お嬢さま』

『オ、誰かと思えば、蟬阿弥であつたか』

『はい、二夜のお宿にあずかりましたが、明朝は旅の先へ向かいます。どうも何かと、お世話になりました』

『それは、なごりおしいことじゃ』

『そのおなごりに、今宵は秘曲を一曲弾じましょう。しかし、いま御主人さまのしていた癡惑星のお話。あれも大層面白くうかがいました。なにかいくさがあるとやらいう事で……』

『蟬阿弥——そちは立ち聞かしていたな』

幸村にこういわれて、片目の琵琶弾は、あわてて目をそらしながら、

『いえ、どういたしまして、決して、立ち聞きなどはしておりませんが、じつはわたしも、向うの縁の端にいて、ふしぎな星もあるものと、ツクツクながめていたところなので』

『そうか、ではもう一つ話してつかわそう。呉志という支那の書に、こういう話がのせてある。——呉の永安二年、一異児あり、丈四尺余、年六、七歳、青衣を着て群児の中に入りてたむむる、目に光芒あり、耀々として外射す、曰くわれは人にあらず、癡惑星なりと、諸児おどろきて大人につぐ、馳せてこれを見れば、身をそばだてて一躍し、一匹の練絹を引くがごとく、天に登りてついに没す——。ソレがあゝの星じゃ、あははははは……』

と幸村は、支那のお伽噺をもちだして、どこまでも、ふたりのいさぐさの前兆を、笑い消してしまつた。

で、蟬阿弥は、煙にまかれた形で、片目をパチパチとしばたいたいていたが、ピョコンと、思いだしたようにおじぎをして、『では、面白いお話を伺いましたお礼やら、宿のお名残をかねまして、ふつつかな一曲を……』

と、ひびにかかえたは桑木の琵琶。

後鳥羽院の流れをくむ、雅楽琵琶を弾くものとみえて、四弦五柱に銀杏の撥、糸をしらべて……憂！と弾きはじめたが、

『おお！』

どうしたのか、四ツ目の糸が、ブツーンと切れて、針金のようにはじけた。

と——そのとき、庭先の薄暗がり、ツウと馳けぬけた人影がある。同時に、幸村のよりかかつている窓枠へ、なにやら、キラリと光るものが立った。

蝶結びの手裏剣文！

蟬阿弥が糸をかけなおしている間に、幸村は、手裏剣にむすびついて飛んできた紙片をとき、チラと読んで、手ばやく奈都女の手へわたした。

そして、ひと言。

『迎えに行つてこい——』

『はい』

奈都女はその紙片を握つたまま、席を立て別部屋へいそいだものの、まだ、何の用をいいつけられたのか、サッパリうなずけていなかった。で、あたりに気をくばりながら、手裏剣文をひろげてみると。

(いそいで紀の川原へ。大助さまお身上危険)

わずか一行、たつた、これだけの文句しかかいてない。

真田紐工場

閑宅の裏は、いちめんの竹林であつた。

懐剣のほかに、尺七、八寸の小太刀を帯びて、飛鳥のように、竹林の闇へ馳けこんでいったのは奈都女にちがいない。

月はあるが、おぼろな夜。

竹林の中はうっそうとしてくらしい。涼々とせせらぐ水——さんざんとして降りかかる夜光の露。

すると、すぐむこうで、カッタン……カッタン……カッタン……と諧調のそろった、きぬたのような音がする。水車でもなし、歯車の音でもなし、一種、かわった木の音だ。

笹むらの闇を走りぬけると、すこし窪地に、鋤形の屋根が見えた。いくつも窓が明いている、みんな明りがついて、カッタン、カッタンという音と一しよに、唄の声まで聞こえた。

それは、紐組工場であつた。

幸村の風格を慕つて、諸国の浪人や、上田城時代の郎党が、百人近くもこの九度山へ集まつてきているのである。

その人々を養つておく紐つくりの細工小屋だ。

しかし、関東の目がうるさい。九度山目付の目が光る。で、家の子郎党は、みな町人や職人風にさせ、真田紐を編ませて置く、外へ出るものは、それを背負つて行商する。

奈都女はそこへ馳けてきた。細工小屋の戸をあけると、合羽に脚絆はきの男が、自分を待つて、腰かけていた。

『オオ、奈都女さま——』

『手裏剣文を投げたのは？』

『はい、わたしでございます』

『弟の大助に、何ぞ、危難が起こつたとやら』

『と思うでございます。——それがたしかに大助さまなら、ここまで帰つてはまいりませんが、じつは今日も紐売りに出て、紀の川べりまでもどつてくると、九度山目付の猿川半之丞と東麻雲八が十四、五人の武士を集めて川原のあたりへ身を隠しました。ハテナ？……とその時みように思つたのは、けさ

大助さまが、高野の上へ登られた時に、たしかに、雲八と半之丞が、いっしよに尾いていったことなので……』

『ああ、そうすると、それはやっぱり大助を待つのかもしれない』

『わたしも、もしや、そうではないかと気がさして、いそいで帰つて来ましたが、幸村さまの部屋をのぞくと、素性の知れない小法師がいるので、手裏剣文をなげました』

『なんだか、弟の身上に、わたしも急に胸騒ぎがしてきた……。では彦松、いそいであんないをしてください、お父上のおいといつけじや』

『貴女さまがおひとりで？』

『大勢では人目につく。それに、細工座のひとつがうごくど、武士という素性が、諸人にしれるであらう』

『ごもつともです』

と、ひも売の彦松、合羽をぬぎすてて脇差一本の身軽、奈都女といっしよに、すぐ外へとび出そうとすると、

『なんだ！ なんだ彦松！』

奥の細工座で、紐組の夜なべをしていた者たちがいっせいに立ち上がってきた。

『いや、さしたる事ではござらぬ』

仲間同士になると、姿は町人でも、自然と地金の武士言葉になる。

『いま聞くとところによれば、若様の身に、何か危難がふりか

かったとうすではないか』

『多寡のしれた九度山目付、たとえ幾人まちうけていようと、おどろく大助さまではないが、ただ、おつかれもあらうから、舟をもつてお迎えにゆくだけです。かたがたのお手